

福田一志先生との出会いと景華園遺跡

本 多 和 典

私にとって福田一志先生との出会いは、1998年の夏のことです。

甕棺墓群と青銅器の出土で知られる島原市の景華園遺跡の内容確認調査に参加させていただいた時でした。

私はその時大学2年で、人生で初めての発掘調査への参加でした。

実測図の書き方さえろくに知らない不勉強の私に、福田先生は景華園遺跡を通じてひと夏をかけて優しく丁寧に考古学と発掘調査の基本を一から指導してくださいました。

調査の中で福田先生が私に、考古学の研究において「無いということ」がどれだけ重要な意味をもつかについて説いてくださったことがあり、その時のことは特に印象に残っています。

のちに私は、大学の卒業論文で研究テーマを「西北九州の弥生墳墓」に選定したのですが、福田先生のもとで景華園遺跡の調査に参加したことがきっかけになったことは言うまでもありません。

考古学の道を志すということ、労働するという、人とふれあい語り合うということ、いろんなことを福田先生の現場で経験し、学んで、まさに景華園遺跡は私にとって考古学人生の原点ともいえる発掘調査となりました。

その後学生時代から県学芸文化課での嘱託時代を経て、現在の職に就いてからも福田先生からは折りに触れてたくさんのご指導と励ましの言葉をいただきました。立山分室でのこと、ご一緒した小野F遺跡の調査、日野江城跡でいただいた現地指導などたくさんの思い出を残してくださいました。

今となっては、あまりにも早過ぎた福田先生の旅立ちをただただ残念に思い、感謝の言葉の一つも伝えていなかった自身を恥じるばかりです。これから考古学の勉強にいそしみ、遺跡とのめぐり会いを大切にすることで、少しでも福田先生へのご恩返しのかわりになればと思う次第です。